

# 精神医学と保育学をつなぐ D.Schön の「状況との省察的対話」の理論

—— 協働的活動における他分野理解の試みから ——

D. Schön's Theory of Reflective Conversation in Situations Connecting Psychiatry and Childcare  
— The significance of understanding other fields in collaborative activities —

児童学科 吉澤 一弥  
Dept. of Child Studies Kazuya Yoshizawa

**抄 録** 筆者は保育学の専門家との協働活動を展開する中で、J. Bowlby のアタッチメント理論が保育実践に役立っていることを知った。Bowlby はクライン学派の影響を受けた精神科医である。同じ精神科医の筆者は、活動で保育園を訪れた際に、発達障害の診断や関わり方について意見を求められた。これらから、現場の保育者が精神医学に高い関心を持っていることがわかった。他分野理解のために、筆者は日本保育学会の学術誌を手にとった。そこでは保育の質の議論が、哲学者 D. Schön の省察的実践を基に考察されていた。Schön は、省察的対話の概念を、精神療法を題材に描いていて、外部からの指摘は、精神療法の専門的視点からも貴重であった。具体的には、スーパービジョンの場面で省察がもっともなされることの認識、「転移」概念を用いた枠組みの転換と循環的対話、固有の問題を熟練者がどう扱うか、精神療法プロセスの検証の方法論などを挙げたい。Schön が提示した疑問も合わせて検討した。

**キーワード**：協働活動、保育学、精神療法、D. Schön、状況との省察的対話

**Abstract** The author noticed that childcare workers have a high interest in psychiatry while developing collaborative activities with childcare specialists. On the other hand, in order to better understand the field of childcare, I perused the journals of the field of childcare. There, the discussion of childcare quality was considered based on the theory of reflective practice by the philosopher D.Schön. Schön described the concept of reflective conversation within the subject of psychotherapy, and external suggestions were also valuable from a professional perspective on psychotherapy. Specifically, the recognition that reflection is most often done during supervision, the transformation of the framework and cyclical dialogue using the "transference" concept of psychoanalysis, and how experts deal with unique problems. Critical consideration was given by enumerating the methodologies for verifying the psychotherapy process. We also considered the questions raised by Schön.

**Keywords:** Collaborative activities, Childcare, Psychotherapy, D. Schön,  
Reflective conversation with the situation

## はじめに

精神科医である筆者は、保育学の専門家と協働的活動を展開する中で、J. Bowlby のアタッチメント理論が保育実践に大いに役立っていることを知った。Bowlby はクライン学派の影響を受けたイギリスの精神分析家であり、母子関係の研究からアタッチメ

ント理論を生み出した。この理論が、現代の保育学における保育者と園児の関係性の理解の基本として深くかかわっていることは、保育学と精神分析学が実践的にも理論的にも接点があることを意味している。いずれも人間の行為や思考そして感情という対象に、応答的かつ共感的にかかわる実践である点が共通していると考えられる。

筆者が保育園を訪れたときに、自閉症スペクトラム障害や注意欠如多動症など発達障害の診断や関わり方、園児で発達障害の疑いをもったとき親にどのように伝えるか、受診の勧め方などを質問されたり、精神病理的現象の意味の解説を求められることがあり、現場の保育者が精神医学に高い関心を持っていることもわかった。

こうした経験は、他分野との活動を行って始めて知ることであり、つながりを実感するものである。このように共通項を見出すことは、協働活動を展開する上で必要な相互理解を深める大事な要素といえるのではないか。さらに他分野の学問体系や専門職教育のシステムなどを知ることで、自分の所属する分野のそれとの違いが明らかになる。ふたつの独立した分野のさまざまな違いを正しく認識することも共通項を見つけるのと同じくらい相互理解にとって必要である。

他分野の学問体系に触れるという目的で、筆者は日本保育学会の学術専門誌「保育学研究」を読む機会を得た。手に取ったのは保育実践における保育者と子どもとの関わりを題材にした「保育の質を問う」特集号であり、保育学の専門家が幼稚園において中堅とベテラン教諭による保育事例の報告が題材であった。その論文ではアメリカの哲学者 D.Schön の省察的实践とフレームの理論によって考察がなされていた。この特集号の総説と合わせて読み解くと、Schön の考え方が、我が国の保育の質研究および保育の質を高めるための重要な概念的ツールのひとつとなっていることが理解できた。

この論文は純粋な質的研究であり、担任はクラスを運営しながらも同時に園児一人一人を丁寧に観察し、問題の構成を行いながら応答していた。これは、精神療法家がクライアントに相対するのと同様に、一人一人の園児を固有の存在として認識し、固有の探求を行うことを意味している。この考え方は、多数の学派が存在する精神療法分野において違いを超えた共通項であり、保育実践と精神療法が Schön のいう省察的対話の構造を有していることになる。

以上から、Schön 自身は、保育学や保育実践には直接言及していないものの、きわめて応答的、相互的な関係性の中から生まれた状況との省察的対話という Schön の概念は、保育実践の理解と深化の促進に有用でありマッチしていると考えられるのである。

Schön の著書『省察的实践とは何か プロフェッショナルの行為と思考』<sup>4)</sup> の第4章に、省察的实践とフレームの理論の背景となった精神療法の事例が詳細に描かれている。精神療法の事例といっても実践者の治療過程の報告ではなく、Schön は、専門職教育におけるスーパービジョンの場面をあえて選択していた。これには明快な理由があった。Schön が重視するのは、問題状況の枠組みの転換 (reframing) を契機としたプロセスによる一連の省察的対話であり、これが実践場面ではなく専門職教育の場面においてもっとも明快に起こると考えている点である。これは省察的対話が生じやすい条件の明示であり、この主張は精神療法の分野に対する Schön による大きな貢献と考えられる。精神療法では、個人スーパービジョンは教育分析と並ぶ専門職教育のシステム中核である。Schön のこの解釈を、スーパービジョンの場面の精神分析学の考え方と比較したい。

不思議なのは、Schön の理論は、保育分野ではこれだけ援用されているのにも関わらず、また精神療法の題材が基になっているにもかかわらず、精神医学や精神分析学の領域で顧みられていないという事実である。そうとはいえ哲学者 Schön による精神療法の事例の詳細な提示と解析は、精神医学の他分野の専門家からのコメントとして稀有であり貴重でもある。とくに精神療法の本質が外部からどのようにみられているのかを客観視する良い機会になる。本稿では、Schön による精神療法分野に対する貢献をいくつか取り上げて考察するとともに、その中で、Schön が提示した疑問についても検討する。

### きっかけとなった多職種連携の活動

筆者が保育学との接点を持つことになった発端は、2016年の熊本地震を被災した保育園と子育て支援センターの調査活動を精神科医である筆者が依頼されたことである。2016年4月14日と16日の熊本地震の4カ月後にこの依頼を受けて、地震発生の約半年後の10月に現地入りした。

依頼主は熊本県の保育園の園長であり子育て支援の全国的組織の役職者でもあった。精神科医、臨床心理学、発達心理学、幼児教育学が専門である多職種のメンバーで調査チームを作って、2度にわたって現地入りして、現地の保育関係者の方々と熊本県内の保育園と子育て支援センターを20か所以上回って聴き取りなどを行った。このときのご縁で、

その後保育分野の実践者や研究者とさまざまな協働活動をするようになった<sup>1)</sup>。

この過程の中で、筆者は保育学のことをより詳しく知りたいと思い、日本保育学会に入会した。その後学会から送られてきた雑誌で「保育の質」の特集号というのがあり、さっそく読んでみた。「保育の質」には、外的なもの、内的なものがあることが紹介されていて、特集号の編者である戸田は、『保育の質を問う〈総説〉』<sup>2)</sup>において、Schön の省察的実践者の考えやそこから得られる実践知の概念が、保育実践を深く考察するための理論的根拠になっていることを紹介していた。またこの観点から投稿された畠山論文『自由遊び場面における保育者の「フレーム」を通じた状況理解と子どもへの関わり—保育者の語りの分析から—』にも、Schön のフレームと省察的実践者のことが考察の中心に置かれていて、現代の保育学の質的研究にとって、Schön の考えが重要視されていることを知った。

畠山論文『自由遊び場面における保育者の「フレーム」を通じた状況理解と子どもへの関わり—保育者の語りの分析から—』の理論的組み立ては以下のとおりである。

- (1) 「保育者のあり方」を明らかにするためには、保育状況における保育者の思考や判断と保育者の関わりについて検討する必要であること。
- (2) この思考や判断を明らかにするために、「実践知」「行為の中の省察」という Schön の反省的実践者の考え方を引いていること。
- (3) 保育実践の中での思考、行為、判断を解明するには保育者がどのようなフレームを用いたかを明らかにする必要があること。
- (4) 保育のフレームである「専門的ルール」は「保育者が無意識的、意識的に実践の中に起こる出来事を包括＝理解し、行為につなげる際の基盤・基準」と定義できること。
- (5) 保育のフレームは、子どもとの関わりを通して得られる子ども理解や保育者が持つ発達観を基にした期待や願いが影響していること。
- (6) 保育者はフレームによって問題状況を問題として構成し、解決するために対応しているが、複数のフレームによって、問題を構成する場合もあること。

・自由遊び場面の「今ここ」の状況を、保育者が

どのようなフレームによって理解しているのかについて明らかにすることである。幼稚園教諭 3 名（保育歴 8 年、9 年、20 年）の自由遊びの保育実践場面をビデオ撮影し、その後、個々に自由遊び場面における様々な状況をどのように理解しながら、子どもたちと関わっているのかについて半構造化面接を行った。その結果、①保育者はフレームによって問題状況を問題とし、問題を解決するために対応していること、②複数のフレームによって、1つの問題状況から問題を構成する場合もあること、③保育者が持つフレームは、それ以前の子どもとの関わりによって得られた子ども理解、保育者の発達観を基にした期待や願いが影響していることの 3 点が明らかになった。

・つまり、「保育全体に対する大きな方向づけ」の判断と、子どもたちに対する「個々の関わり」についての判断である。この点を踏まえるならば、その都度毎の問題状況による判断だけではなく、その保育者が保育を行う事前から持っている保育のねらいや意図、保育観などとの関連を含めながら、その都度のフレームと全体的なフレームの関係性について検討する必要があるだろう。・（畠山からの引用、p11-12）

また課題として、問題の構成の仕方は、担任保育者独自の解釈によるものであると考えられ、主観の域を出ないという、今回の方法論の限界についても畠山は触れている。

・本研究では、実際の保育実践を対象にして、保育者自らその際に考えていたことを語るという手続きを用いた。このことから、ここで語られる保育状況や子ども理解の内容は、担任保育者独自の解釈によるものであると考えられ、担任保育者の主観の域を出ない。他の保育者では異なった解釈をする可能性や同一の担任保育者であっても事後の振り返りの際に、異なる解釈を行うこともあり得るだろう。そのような意味では、保育者が語った内容は、恒常的とまでは言い切れないかもしれない。・（畠山からの引用、p18）

精神療法の立場からこの課題を考えると、Schön の専門職教育における事例のように、教師なり上級者との個人スーパービジョンの形態をとることがで

できれば、解決すると思われる。保育の事例では、保育実践の報告者が中堅とベテランであるが、精神療法の世界においては、中堅やベテランであっても上級者に個人を受けたり教育分析を受けることは当たり前に行われている。これにより、独りよがりになる主観のリスクは軽減され、上級者が問題の枠組みの転換を積極的に行うので、対話的な省察の機会が増大し、保育実践にフィードバックが可能となる循環が起きやすいと考えられる。

## Schön の行為の中の省察と精神療法への貢献

Schön が精神療法のスーパービジョンを題材に対して行った「行為の中の省察」の議論の展開と成果に関して、精神医学の立場からその貢献について述べる。

### 1. スーパービジョンと行為の中の省察

Schön の主要概念である行為の中の省察におけるブレイクスルーは、問題状況の枠組みの転換 (reframing) である。実践場面ではなく専門職教育の場面をあえて選択して取り上げていることは Schön の慧眼であり、そこで省察的対話をもっとも明快に起こるという考えである。これは、省察的対話の題材として、著書の1章の収める分量として好都合という意味ではなく、省察的対話が精神療法のスーパービジョンの場面でこそ明確に発現するという条件の明確化といえる。

実際に、精神療法の専門職教育のカリキュラムの中で、1対1の対話で構成される個人スーパービジョンは教育分析と並んでとりわけ重要な位置を占める。上級者と研修医の組み合わせが対話を深め、発達促進的であるという考えは、L. Vygotskiy の最近接発達領域の概念においても示されている。Vygotskiy はまた、教師や上級者による媒介手段の提供による積極的な介入姿勢の重要性を主張している。この介入主義の背景には、介入がないところで自然発生的にはこの発達の動きは起こらないという考えである<sup>5)</sup>。これを Schön の精神療法の題材にあてはめると、問題状況のとらえ方や枠組みの転換という介入が、この媒介手段に相当すると考えられる。介入主義は、精神分析学の創始者である S. Freud 自身も、精神分析療法の技法における解釈的介入の徹底操作ということ で言及している。Freud も、患者の治療的变化を促し定着させるには、分析家による積極的な介入

が必要であるという認識を持っていた<sup>6)</sup>。

Schön が解明したダイナミズムは、スーパービジョンという行為の場面の開始にあたって、まず研修医が患者の直面する状況をスーパーバイザーにどのように伝えることから始まり、それに対して、スーパーバイザーが状況の枠組みの転換を行うことで、研修医が行き詰まりを打開できるようにするというサイクルの繰り返しである。両者がこの役割を担う点で、スーパービジョンは固有で不確実な状況との省察的対話となるのである。

・問題は前もって与えられているわけではない。むしろ研修医が問題を提示し、それをスーパーバイザーが批評し、却下している。・学生は行き詰まってしまう、・苦境に陥っているのを問題の枠組み (frame) の作り方によるものだと考え、・新しい意味づけを行おうとする。・その状況の枠組みの転換 (reframe) をしなければならないのである。・つまり、固有で不確実な状況との省察的対話のプロセスに携わっているのである。(Schön から引用, p148-149)

### 2. 「転移」概念への着目

精神療法のスーパービジョンにおいて、枠組みの転換を行うために Schön が注目したのは、精神分析学の「転移」概念である。スーパービジョンにおける枠組みの転換の観点やツールは、転移概念だけではなく多様な方法がある中で、Schön が転移概念に集中して上げて考察している。そこから状況との省察的対話を一般化しているように読めるが、この点は精神療法における観点を矮小化しているように思える。

そうは言っても転移 (transference) は、Freud 以来患者理解と介入の方法論として、精神分析学のもっとも基本的な考え方であり、初学者であっても転移に関する知識としては十分に持ち合わせている。また、実際にスーパーバイザーがコメントする重要な切り口の一つであることは間違いない。ただしこの事例で、3年目の研修医が「転移」概念を用いて枠組みの転換をはかろうとするスーパーバイザーの方向性に当惑する反応を見せたことは意味がある。

スーパーバイザー：君は、他人との間で経験したことを、治療者との関係においても経験することが

あるのは、とくにめずらしいわけではないと、患者にいつも伝えているにかな。それと、治療関係において、患者がどのように身動きできない状態なのかを考え、患者とともに問題を解決しようとするために、治療者は有利な立場にいるということも話してきただろうか。

(この問いかけを、研修医は内心で聞かずもがな、とも思ったのだろうか。)

研修医：ええ、まあ、それは治療の一環ですから・・・。(Schön から引用, p121)

スーパーバイザーが「転移」概念に着目した理由はいろいろ推測できる。「転移」概念は初心者にも馴染みのある知識であったとしても、実践場面でのように使うのか、またどういったタイミングで用いるのが良いかという判断が難しいところである。それを的確に示せるのがスーパーバイザーの<技>ということになる。また、同じ患者であっても、研修医がみている状況と間接的ながらスーパーバイザーがみつけた状況とは問題のとらえ方が異なる。スーパーバイザーは、このときに転移を扱うことが枠組みの転換 (reframing) をはかるために最善であるという判断をくだしたと考えられる。

この後、実際に患者の状況は再構成されて予期せぬ変化が生じ、研修医から新しい物語が語られるという循環が生じていて、Schön はこれをスーパービジョンのシェーマとしている。実際には、これ以外にも多様な切り口に対応する枠組みの転換のシェーマが想定できる。

状況の枠組みを転換させることから何が作り出されるか見極めるために、転換した枠組みを状況にあてはめて吟味する。・・・手立てを講じ、結果を見出し、意味づけ、評価し、さらに手立てを講じるという行為の組み合わせをおこなう。・・・現象を理解し問題を解決し、機会を利用する。

・・・講じる手立ては、状況に新しい発見を与えるだけでなく、予期せぬ変化をもたらすことがある。状況は過去を語り、(スーパーバイザーは)それに耳を傾ける。・・・再び状況の枠組みを転換するのである。

・・・行為の中の省察と呼ばれる新しい発見を生み出して。そのプロセスは、評価、行為、そして再評価の各段階を通して螺旋状に進んでいく。固有で不

確かな状況は理解されるようになり、理解しようとする試みを通して変化するようになる。(Schön から引用, p150)

転移概念にこだわった理由でもう一つ考えられるのは、Schön がさまざまな学派の中でとくに E. Erikson の精神分析を念頭においていたと思われることである。そうであるとする、Schön の精神療法と状況との省察的対話の対応と一致は、転移重視の Erikson の精神分析の文脈において捕らえることができ整合性を持つことになる。また、Erikson のいう探求し続ける能力によって省察的な対話が継続されるということも Schön は強調している。

そうはいっても、Schön が示した省察のプロセスの構造は、精神療法の目的である「探求」の性質を再考することを促してくれる点で刺激的であり意義深い。治療実践やスーパービジョンがときどき陥りやすいマンネリ化に警鐘を鳴らすことにもなると思われる。

### 3. 専門職の技における固有の問題へのアプローチの仕方

Schön は、経験値と基礎理論を固有の問題に対してどのように反映させるかというスーパーバイザーの<技>に関して綿密に検討している。ここは、ブラックボックスになりやすいところであり、スーパーバイザーがどう機能するのかという暗闇の部分に当てた。とくにレパトリーの多様性と、未知の状況を既知の状況と見なして、同じように行為するというスーパーバイザーの能力を指摘している。

スーパーバイザーは患者のジレンマを認識することから、次第に自分が基礎を置く価値観や理論と一致する解釈へと結びつけていく。・・・以前の部分的な解釈を新たな解釈の中に統合させ、それを精神分析の理論に一致させてきたのである。(Schön から引用, P154)

・・・過去の経験から引き出されたルールをそのまま適応することはしない。そうすれば、状況を既知のことがらの一例として扱い、固有の状況を無視してしまうからである。・・・すでに知っていることに触れないまま根も葉もない新しい説明を作り上げることもない。・・・(スーパーバイザーは)事例、イメージ、理解、行動の<レパトリー>を築き上げていると

いうことである。・よく知らない固有な状況を、既知のものと類似しているが異なっているもの、とみなすのである。・相違点と類似点を省察しているといえる。・(Schön から引用, p158)

Schön は、精神療法やスーパービジョンの検証に関して、探査的な実験、手立てを試す実験、仮説を試す実験の3つの方法を示した。探査的な実験の予測や期待をせずに何が起こるかを確かめるためだけに行われる実験であり、新しいことの発見につながる。手立てを試す実験は、条件を与えて意図的な変化を生み出すために頭の中で行うシミュレーションである。仮説を試す実験は、事例を説明する上でもっとも理にかなったふさわしい仮説を同定する。スーパーバイザーが固有のものとして捉える事例の中で行う直感的理解を含めた行為の中の省察の中にこの3段階が含まれる構造を示したことは、妥当性の検証と厳密性に関する重要な指摘である。

精神療法の専門家による検証については、現代のアメリカの精神分析医 R. Langs のリスニング・プロセスの一連の研究がある。これもスーパービジョンにおけるプロセスの解析である。治療者の介入とその後引きつづく研修医からの新たな題材(物語)を得て、アダプティブ・コンテクスト(対応する文脈・治療における過去の出来事)の特定と、意味のある介入であったかどうかの検証を、引き続き現れるナラティブな題材から綿密に検討している。この手法は、スーパービジョンの構造と機能も評価の側面も可視化している<sup>8)</sup>。

Langs は、症例の提示に見られる問題の構成を治療者の逸脱(misalliance)として捉える。それにより生じている行き詰まった状況を打開するためにアダプティブ・コンテクストの発見という傾聴作業を行うが、これはSchönの「枠組みを転換」に相当するものである。アダプティブ・コンテクストの提示によって、治療者が新しい題材を提供し始める。Langsの検証過程は、このようにスーパーバイザーの介入に対する治療者のとくに無意識的気づきを例証しながら進められる。無意識的であるからこそ、引き続き新しい物語の中に隠喩的に表現される場合が多いのである。この検証過程の全体的一貫性と適合性についてもスーパーバイザーは認識している。

Langs は、精神分析療法の固有の枠組み(治療者の解釈的介入に限定した中立性と時間や空間的治療

構造)からの逸脱の研究について、Freudの症例に立ち返って(ドラの症例、ねずみ男の症例、狼男の症例など)解明した<sup>9)</sup>。

R. Ganzarain は、アメリカの自我心理学派の分析治療の詳細なプロセスの件検討を対象関係論の立場から行った。同じ題材でも、学派によって問題のとらえ方や焦点の当て方や時期が異なり、その後の展開がいかに変わるかを具体的に示した<sup>10)</sup>。固有の不確かな状況との対話による探求が患者の利益に結び付くという考え方は、各学派に共通するにしても、そこ至る道筋は大きく異なる。同様に検証に関しても学派によってバリエーションがあると考えられる。

#### 4. Schön 疑問について

Schön は、スーパービジョンの関係性が省察の対象になっていないことについて、「会話の中での省察を旨とするプロフェッショナルであることを思うならば驚くべきことである」と述べている。そもそも研修医は、今のスーパーバイザーとのスーパービジョンの回数が少ないことの不満や不安をいだいていたために、録音したプロトコルをSchönに提供しインタビューを受けるという動機があったようだ(しかし残念ながら、どちらが最初にアプローチしたかは書かれていない)。

研修医はSchönとのインタビューの中で、研修医はスーパーバイザーとの関係が、その患者と自分との関係に似ていて身動きの取れない状況になっていること、そしてもっと多くの援助を得ようとしていること自体に怒りを感じていることに気がついた。しかしこの論点がスーパービジョンの中で浮かび上がったくない点をSchönは疑問視しているのである。

・研修医はこの担当者との関係に面接の数の少なさをも含め、不安を抱いていた。そこで、彼との対話をその都度テープに取り、そのプロトコルについて討論をすることでSchönの研究チームと同意した。(Schönから引用, p119)

・スーパーバイザーの教え方は、・秘儀性と熟練(mystery and mastery)のアプローチと呼ぶものである。題材についての熟練を実際の行為で示しているけれども、その理由や意味、その熟練の源泉については明かさないのである。・研修医の学び方は、この教え方と対応するものとなっている。それは理由もわからぬままに従う学び方、不可思議な受

動のアプローチである。研修医は不満と欲求阻止の感覚を抑えスーパーバイザーの指導に従い、その理由や判断の源泉をつかむことなしに、一連の解釈過程に加わっているのである。(Schön から引用, p144)

Schön の疑問を精神療法の立場からいくつかの論点に分けて検討する。

### (1) 精神療法の訓練システムに関すること

精神分析学の訓練システムに関係する論点である。研修医は精神分析学の3年目であり、これまでに60人のスーパーバイザーから指導を受けていた。スーパーバイザーの60人という数の多さは、精神分析学の各流派がひしめき合い、その中で自分の将来のアイデンティティーにどの流派を選択するかという課題が、当時のアメリカの精神療法の専門職教育において存在していた背景をまず知る必要がある。

その上で、個人スーパービジョンでは、両者の関係性にお互い気がついていても、そのことをスーパービジョンの場で取り上げないのが通例である。扱わざるを得ない場合には、教育分析が勧められることになる。この研修医は現在教育分析を受けているかどうかの情報は無いが、今回の問題つまり研修医がスーパーバイザーに不満と欲求阻止の感覚をもって抑えていることは、通常のスーパービジョンの場では検討の対象にならないと思われる。この点でSchönの省察的対話と専門職教育のシステムとしての個人スーパービジョンの対話は必ずしもイコールではない。

欲求阻止の問題を扱える可能性があるのは、教育分析の他には、このことを明らかにしたSchönとのインタビューの場が考えられよう。なぜこうした気づきに辿り着いたのかの理由とその意味に省察が及べば建設的である。

### (2) 源泉を知りたいという内容について

研修医の欲求阻止の状況を作り出しているのが、源泉を知りたいという内容であることから、M. Kleinの源泉への羨望による攻撃のテーマと陰性治療反応という事象との関連が推測される。

Kleinは、Freudの死の欲動論と陰性治療反応の概念を、対象関係論的に推敲した<sup>11) 12)</sup>。精神分析学において、治療関係や個人スーパービジョンのよう

な親密な2者関係で引き起こされる力動は、乳幼児と母親の2者関係モデルになぞられることができる。Kleinは、豊かな乳や智慧を与えてくれる理想的対象である母親に対して、羨望(envy)の強い乳児は口唇サディズム的な攻撃性を母親に向けた場合、良い対象である母親は、意地悪で(nusty)で関心を持ってくれない悪い対象へと赤ん坊の空想の中で変化すると主張した。

これはもっぱら羨望の攻撃的要素の母親への投影による知覚の変化と考えられる(投影同一視)。Freudは、「終わりある分析と終わりのなき分析」の中で、治療の進展が起こる筈の場面でそれが起こらない場合、陰性治療反応と呼び、死の本能の反映であると考えた。この死の本能論がKleinの羨望の概念に受け継がれている。

研修医がこの源泉問題でスーパーバイザーとしてくらくら感を感じていて、それを話題にできていない状況は、解釈と思考の源泉そのものに注目が向いていることに関係し、陰性治療反応が薄められた形で潜在的に働いている可能性が推測されるのである。

### (3) 枠組みの転換のツールの別の観点

ここでは、「転移」概念に縛られることの弊害についても考えてみたい。先に述べたように、3年目の研修医の患者の症例の枠組みの転換のためにスーパーバイザーが「転移」概念を頻用することは考えにくい。むしろ、研修医の最初の提示の中に、自らの枠組み作りとして「転移」概念を含んだ構成になっている方が自然とも思えるのである。

ここでは、枠組みの転換という介入のためのツールとして、「転移」概念以外の方法を検討したい。この事例でスーパーバイザーが研修医に対して行ったいくつかの「質問」がある。研修医への質問による介入は鋭く矢継ぎ早であり的を射ていた。そしていくつかの質問が、スーパーバイザーの仮説を検証するために用意されていたと考えられる。この質問の内容を研修医が推し量ることができれば、スーパーバイザーがどこに引っ掛かり、何を考えているのか、つまり源泉についてのヒントが満載であると思えるのである。この事例では、質問が患者の内的葛藤の本質解明の大きい手がかりとなっていて、質問という介入から新たに展開される物語、ここでは、ボーイフレンドとの諍いの詳細なエピソードが語られたともいえる。質問は省察的対話と呼び起こす端

緒であると同時に促進する触媒でもあることがわかる。

・・・研修医が患者の語ることについて報告しているのを受身的に聴いているわけでは決してない。彼はそうした報告に対して積極的に探りを入れる。たとえば、彼女のボーイフレンドとの諍いのストーリーを跡づけつつ、彼は次のようにいくつもの問いを挟んでいく。「その『一緒にいた』というのは、どういう意味かな?」「彼女はほかの男性と出かけるのかね。」「どういう意味だね、男性が勝手に彼女の食事を注文したということなのかな。」「どんなふうに彼女は喧嘩に負けるのだろうか」。スーパーバイザーはこの彼女がどのように身動きできなくなるのかを解明していくために、いくつかのストーリーを組み立てていく。これらの質問からは、スーパーバイザーがこれ以降に構成していく問題を解決のための起点となるイメージを読み取ることができる。  
(Schön から引用, p134)

そして「質問」こそがスーパーバイザーの解釈や思考の源泉を反映するものであり、その場合は研修医の抱くスーパーバイザーの<技>の秘儀性の壁は解消され、欲求阻止の感覚は減じるのではないかと思われる。

## おわりに

多職種連携の活動は、本来の目的以外にも思いがけない発見をすることがある。本稿では保育分野の専門家と保育者を行った協働のプロセスの中で、他分野である保育学の理解の一環として、学術専門誌を手にしたことで、精神療法の実践から生まれた哲学者 Schön による概念である、状況の中の省察的対話から生まれる枠組みの転換や実践知が、保育実践の検討から保育の質を高めるツールとして使われていることを知った。また Schön の精神療法の記述は、精神療法の専門家にとっても良い刺激となった。とくにスーパービジョンのもつ濃縮された省察構造、そのプロセスの綿密な検証と厳密性の考え方は、精神療法の実践やスーパービジョンの質とプロセスを再考する良いきっかけになった。一方、転移概念を枠組みの転換に用いて状況との省察的対話を描いて一般化していることの疑問も浮かんた。

多職種連携の活動を通して必然的に生まれる対人交流の発展とそこから生まれる価値は言うまでもない。それに加えて、本稿で示したように学問的なつながりを見出すことにより、他分野への関心や興味が一層高まり、協働の動機や質において重層性を増すと考えられる。こういった試みを拡大することも多職種連携の健全な推進にとって大切な要素であると考えた。

## 参考文献・引用文献

- 1) 吉澤一弥他：震度 7 そのとき保育者としてどうしますか？—くまもとプロジェクトからの 10 の提言—, 日本多機関連携臨床学会, 2019 年 12 月
- 2) 戸田雅美：『保育の質を問う（総説）』, 保育学研究, 第 56 巻・第 3 号 2018 年 12 月
- 3) 畠山寛：『自由遊び場面における保育者の「フレーム」を通じた状況理解と子どもへの関わり—保育者の語りの分析から—』, 保育学研究, 第 56 巻・第 3 号, 2018 年 12 月
- 4) D. A. Schön (柳沢昌一, 三輪健二監訳)：『省察的実践とは何かプロフェッショナルの行為と思考』鳳書房 2007 年 11 月
- 5) Y. Engeström (山住勝広訳)：『拡張による学習—発達研究への活動理論からのアプローチ』完訳増補版 新曜社 2020 年 3 月
- 6) 小此木啓吾 監修：『精神分析事典』, 岩崎学術出版社, 2002 年
- 7) S. Freud (小此木啓吾訳)：『終わりある分析と終わりなき分析』Freud 著作集 6, 人文書院, 1964 年
- 8) R. Langs : The Listening process, Jason Aronson, New York, 1978
- 9) R. Langs : Technique in Transition, Jason Aronson, New York, 1978
- 10) R. Ganzarain : 精神分析セミナー主催の東京レクチャー, 東京西新宿三井ビル, 1978
- 11) J. Riviere (椋田容世訳)：『陰性治療反応の分析への寄与』 松木邦裕著「対象関係論の基礎—クライニアン・クラシックス」, 新曜社 2003 年 9 月
- 12) M. Klein : Envy and Gratitude and Other Works 1946-1963, The Hogarth Press, London, 1984